

人前で発言することへの意識変化

— 大学1年生の事例から —

The change in attitudes toward public speaking: A case of first-year university students

次世代教育学部教育経営学科

吉澤 英里

YOSHIZAWA, Eri

Department of Educational Administration

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：スピーチ，初年次教育

要旨：初年次教育で行われているスピーチコンテストへ向けての取り組みの成果について，1年生を対象に指標を用いて検討をした。9カ月にわたる縦断的調査を通して，人前で話すことへの意識（得意・苦手意識）の変化と，得意・苦手意識に影響を与えうる要因を明らかにすることを試みた。

Keywords：Speech communication, first year experience

I. はじめに

1-1. 環太平洋大学におけるこれまでの経緯

環太平洋大学では，人の前で発言や発表をすることを全学的に推奨し，学内でそのような機会を多く設けている。例えば，スピーチコンテスト，プレゼンテーションコンテスト，あるいはオープンキャンパスなど，学生が聴衆の前で話す機会が多い。このような取り組みを経て，学生が自ら人前で話そうとする意識が年々高まっていることを実感している。著者は4年間，1年生のメンターを務めてきた。その立場から見ても，学生の成長を感じられる。主観的には学生の変化を述べることができるが，それを裏付ける客観的な根拠はない。著者が知る限り，学生の得意・苦手意識について学内で測定されたデータは認められない。今後もこのような教育実践を行ううえで，データの蓄積が極めて重要であろう。以上の経緯から，本稿の着想に至った。

1-2. 目的

本稿では，人の前で発言や発表することへの学生の得意意識と苦手意識を扱う。

日向野・小口（2007）は「対人場面において相互作用する他者，またはその場面に対する，不快感やわずらわしさなどの感情および自他の行動や評価に対する懸念（p.135）」を対面苦手意識と呼んだ。そこで，本

稿では「大勢の人前で話すという場面において，他者あるいはその場面に対する，不快感やわずらわしさなどの感情および自他の行動や評価に対する懸念が強い状態」を人前で話すことへの苦手意識（以下，意識とする）とし，「大勢の人前で話すという場面において，他者あるいはその場面に対する，不快感やわずらわしさなどの感情および自他の行動や評価に対する懸念が弱い状態」を得意意識とする。さらに，この二つをあわせて人前で話すことへの得意・苦手意識（以下，得意・苦手意識）とする。

先行研究として，吉澤（2014）では全国の18歳～23歳の生徒および学生（専門学校，短期大学，大学，大学院）を対象に，得意・苦手意識とそうように考える理由を調査した。その結果，全体では73.0%，大学では72.4%の学生がスピーチを苦手だと答えた。さらに，自由記述形式の回答を元に理由を整理した結果，得意・苦手意識に影響を与える要因には，身体的変化（震えたり，緊張したり，頭が真っ白になるなど），他者への意識（人目が気になる，悪く評価されるのではない不安など），内容構成能力の自己評価（すぐに内容を考えられる，アドリブが入れられる）があることがわかった。

そこで，上記のうちの認知的側面である他者への意識と内容構成能力の自己評価に注目する。そして，それらが学生の得意・苦手意識の変化にどのような影響を与えるのかを検討する。さらに，9カ月間の縦断的

調査を通して、得意・苦手意識の変化と、要因間の関係についても明らかにすることを試みる。

II. 調査 1

2-1. 目的

得意・苦手意識の構成要因を明らかにし、それらを測定するための尺度を試作する。さらに、1年間以上の大学生活を経た上級生と新入生との違いについて検討する。

2-2. 方法

調査対象者 環太平洋大学の1年生（新入生）294名、2年生以上（上級生）149名が調査に協力した。

質問紙 質問項目は吉澤（2014）をもとに作成した。Q1からQ5は内容構成能力の自己評価を測定するものとして作成し、Q6からQ11は他者への意識を測定するものとして作成した。はじめに「あなたは、大勢の人の前で話をするようになりました。その時のあなた自身が一番近いのはどれですか。」と教示した。そして、それぞれの質問項目について、「0：全くそう思わない」、「1：そう思わない」、「2：どちらかといえばそう思わない」、「3：どちらかといえばそう思う」、「4：そう思う」、「5：非常にそう思う」の6件法で回答を求めた。

さらに、得意・苦手意識を測定した。Q12では、「あなたは大勢の人の前で話をするのがどれくらい得意、あるいは苦手ですか？ 他の人と比較をするのではなく、あなた自身の率直な気持ちを答えてください。」と教示し、「0：とても苦手」、「1：苦手」、「2：どちらかといえば、苦手」、「3：どちらかといえば、得意」、「4：得意」、「5：とても得意」の6件法で回答を求めた。

2-3. 結果と考察

得られたデータのうち、Q1からQ11について、すべて同じ選択肢に丸をつけたものは信頼性が疑われるため、分析対象から除外した。さらに、途中で回答が途切れているものも分析対象から除外した。その結果、分析対象は新入生が287名（男性192名、女性94名、無回答1名、平均18.05歳、SD 0.28）、上級生が134名（男性86名、女性46名、無回答2名、平均19.25歳、SD 0.54）であった。

因子分析 本調査にて作成した尺度の因子構造について調べるため、Q1からQ11のデータを対象に、

最尤法（プロマックス回転）による因子分析を行った。固有値は第1因子4.24、第2因子1.61、第3因子1.34、第4因子0.78と続いた。そこで、固有値が1以上の3因子が適切であると判断した。Table 1に因子分析後の因子パターンを示した。因子ごとに負荷量の高い項目の内容を考慮し、第1因子から順番に、「内容構成力への自信のなさ」、「人前に立つことへの嫌悪」、「他者への意識の高まり」とそれぞれ命名した。信頼性（内的整合性）を示す α 係数はそれぞれ.82、.77、.89であり、良好な値を示していた。

因子分析で得られた3因子構造のデータへの当てはまりの良さについて検討するため、確証的因子分析を行った。潜在変数を3つ置き、それぞれに対して該当する項目（観測変数）からのパスを引いた。その結果、 $X^2(41) = 206.19$ ($p < .001$), CFI = .915, RMSEA = .099, SRMR = .071, AIC = 13521.029, BIC = 13621.372であった。RMSEAは.05以下であれば当てはまりがよく、.10以上であれば当てはまりが悪いと判断される（豊田, 2014）。本モデルは十分に当てはまりの良いものではないが、許容範囲であった。

学年および性別による比較 次に、得意・苦手意識に加えて、3因子（「内容構成力への自信のなさ」、「人前に立つことへの嫌悪」、「他者への意識の高まり」）に対する学年と性別の交互作用を検討した。因子分析の結果をふまえて、因子ごとに質問項目の平均を算出し、各因子の得点とした。なお、性別が無回答であったデータをこれ以降の分析対象から除外した。理由は、サンプル数が少なく群として成立しないためである。

3因子と得意・苦手意識のそれぞれに対して、学年（新入生、上級生）と性別（男性、女性）の2要因分散分析を行った。その結果、人前に立つことへの嫌悪と得意・苦手意識で交互作用が有意であった（人前に立つことへの嫌悪： $F(1,414) = 5.38$, $p < .05$, $\eta_G^2 = .01$, 得意・苦手意識： $F(1,410) = 4.89$, $p < .05$, $\eta_G^2 = .01$ ）。単純主効果の検定および多重比較の結果、人前に立つことへの嫌悪では、女性で上級生の得点が新入生よりも高く（ $F(1,414) = 10.28$, $p < .01$, $\eta_G^2 = .02$ ）、上級生で女性の得点が男性よりも高かった（ $F(1,414) = 4.17$, $p < .05$, $\eta_G^2 = .01$ ）。また、得意・苦手意識では、女性で上級生の得点が新入生よりも低かった（ $F(1,410) = 7.41$, $p < .01$, $\eta_G^2 = .02$ ）。なお、内容構成力への自信のなさ和他者への意識の高まりは主効果、交互作用ともに有意では

なかった (Table 2)。

重回帰分析による検討 得意・苦手意識を目的変数, 3 因子 (内容構成力への自信のなさ, 人前に立つことへの嫌悪, 他者への意識の高まり), 性別および学年を説明変数とした階層的重回帰分析を実施した。得意・苦手意識と 3 因子との相関係数 (Pearson) は, それぞれ $r = -.54, -.72, -.31$ ($ps < .001$) であった。なお, 性別と学年はそれぞれダミー変数を投入した (性別は 0 を女性, 1 を男性とし, 学年は 0 を新入生, 1 を上級生とした)。Step 1 に性別と学年を投入し, Step 2 にはさらに 3 因子を投入した (Table 3)。Step 2 での説明力の変化量は有意であった ($p < .05$)。重回帰分析の結果から, 性別と学年は得意・苦手意識

を予測しなかった。一方, 内容構成力への自信のなさ, 人前に立つことへの嫌悪および他者への意識の高まりはそれぞれ得意・苦手意識を予測した。具体的には, 内容構成力への自信のなさと人前に立つことへの嫌悪が低く, 他者への意識が高いほど, スピーチが得意であると感じていた。

以上の分析から, 作成した質問項目は得意・苦手意識と関連することが示された。学年間および性別間の比較では, 特に上級生の女性で苦手意識が高かった。この理由として, 彼らが 1 年生の頃からスピーチコンテストに参加しており, 同級生の良い発表を見聞きすることで, 自己の能力を相対的に低く評価していることが推測される。今回の調査は 4 月に行われたので,

Table 1 因子分析結果

	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
因子 1 (内容構成能力への自信のなさ $\alpha = .82$)				
2. 話す内容を考えるのは難しい。*	.98	-.05	-.03	.73
1. 話す内容を考えるのに時間がかかる。*	.91	-.08	.00	.69
4. 話す内容を論理立てて (起承転結を意識しながら) 考えるのは難しい。*	.46	.12	.03	.32
5. 話をしている途中でアドリブを入れるのは難しい。*	.45	.20	.06	.41
因子 2 (人前に立つことへの嫌悪 $\alpha = .77$)				
7. 大勢の人の前に立つのは好き。	.07	-.88	.04	.52
8. 自分の考えを大勢の人に伝えるのは好き。	-.01	-.74	.11	.44
6. 人前で話すのは嫌い。*	.24	.55	.02	.51
9. 人から注目されるのは嫌い。*	.03	.52	.07	.32
3. 自分の意見を言うのは簡単だ。	.04	-.41	-.14	.19
因子 3 (他者への意識の高まり $\alpha = .89$)				
11. 人の視線が気になる。	-.03	.05	.99	.67
10. 人からどう思われるか気になる。	.05	-.05	.79	.64
因子相関行列				
1	-			
2	.48	-		
3	.39	.30	-	

* 逆転項目

Table 2 学年および性別ごとの得点

	新入生 (1 年生)				上級生 (2~4 年生)			
	男性		女性		男性		女性	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
得意・苦手意識	2.06	1.08	2.23	1.24	2.06	1.06	1.67	1.23
内容構成能力への自信のなさ	2.98	1.04	2.98	1.14	2.81	1.14	3.12	1.07
人前に立つことへの嫌悪	2.65	0.89	2.52	1.07	2.71	0.76	3.06	1.14
他者への意識の高まり	2.88	1.23	2.95	1.26	2.88	1.22	3.38	1.15

1年生への調査を継続し、同級生の発表を見聞きすることの影響も含めて検討すべきだろう。

Table 3 得意・苦手意識への階層的重回帰分析 (β)

	Step 1	Step 2
性別 (0: 女性, 1: 男性)	.00	.02
学年 (0: 新入生, 1: 上級生)	-.08	-.03
内容構成力への自信のなさ		-.28***
人前に立つことへの嫌悪		-.49***
他者への意識の高まり		.33***
R^2	.01	.67***
Adjusted R^2	.00	.67***
ΔR^2		.67

*** $p < .001$

Ⅲ. 調査2

3-1. 目的

9カ月の取り組みの中での得意・苦手意識の変化を調査1で試作した尺度を用いて調べた。

3-2. 方法

調査対象者 環太平洋大学1年生76名（男性53名、女性23名）が調査に協力した。第1調査時の平均年齢は18.04歳、SDは0.20であった。このうち、3回の調査全てに協力し、回答に不備のない58名が分析対象（男性37名、女性21名）となった。

調査時期 2017年4月10日（第1調査： $t1$ ）、2017年7月10日（第2調査： $t2$ ）、2018年1月15日（第3調査： $t3$ ）の3回実施した。

調査項目 Q1からQ11までは、調査1と同様の項目を用いた。「あなたは、大勢の人の前で話をするようになりました。その時のあなた自身が一番近いのはどれですか。選択肢の中から一つを選んで丸をしてください。」と教示し、6件法（0：全くそう思わない～5：非常にそう思う）で回答を求めた。Q12（得意・苦手意識）：「あなたは大勢の人の前で話をするのがどれくらい得意、あるいは苦手ですか？」と教示し、6件法（0：とても苦手～5：とても得意）で回答を求めた。Q13（頻度（ $t2$ と $t3$ のみ））： $t2$ では4月～7月、 $t3$ では9月～1月までのことを振り返らせた。「スピーチ、授業での発表、塾講師のアルバイトなど、大勢の人の前で話をする機会はどれくらいありましたか？ 平均的な頻度を教えて下さい。」と教示し、6件法（0：全くない、1：月に0～1回、2：月に2～3回、3：週に1回、4：週に2～3回、5：週に4回以上）で回答を求めた。ただし、

Q13は本稿の分析には用いない。

手続き 調査は基礎ゼミナールⅠの授業内で実施された。調査の実施にあたり、調査対象者が所属する学科長に調査の許可を得た。調査者を含む4クラスのメンターに調査の実施を依頼し、授業内で配布および回収をした。

分析方法 分散分析と潜在成長曲線モデルによる分析を用いた。各調査時点での得意・苦手意識と3因子（内容構成力への自信のなさ、人前に立つことへの嫌悪、他者への意識の高まり）を従属変数、調査時期（ $t1 \sim t3$ ）を独立変数とした1要因分散分析を実施した。潜在成長曲線モデルは、同じ対象に複数回の測定を行って得られるデータについて、全体的な傾向と個人差を同時に組み込むことができる分析モデルの一つである（山田・村井・杉澤, 2015）。このモデルの利点は、個人差に影響を与える要因を検討できることである。各調査時期（ $t1 \sim t3$ ）での3因子と得意・苦手意識の変数をそれぞれ投入した（Figure 1：仮説モデル1）。なお、 $t1$ から $t3$ は観測変数、切片と傾きおよび誤差は潜在変数であった。

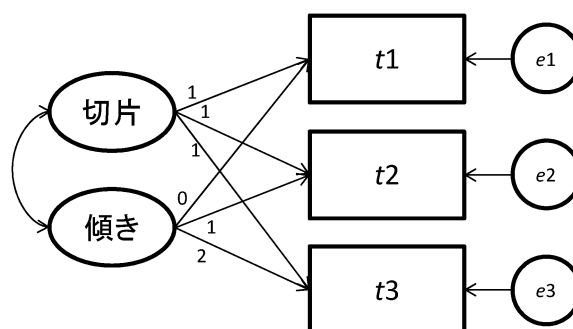


Figure 1 潜在成長曲線モデル（仮説1）

注 eは誤差を表す。 $t1$ から $t3$ には、因子ごとに各調査時点での得点を投入した。

さらに、3因子の成長曲線は $t1$ での得意・苦手意識によって異なるのではないかと考えた。そこで、3因子を対象に、Figure 1の仮説モデルに加えて、標準化した $t1$ の得意・苦手意識の変数から切片および傾きにパスを引いた仮説モデルを立て、分析を実施した（Figure 2：仮説モデル2）。

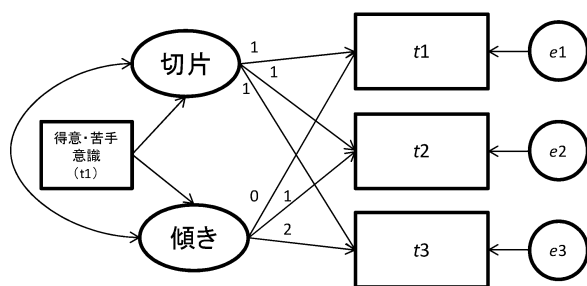


Figure 2 潜在成長曲線モデル（仮説2）

注 eは誤差を表す。右側のt1からt3には、因子ごとに各調査時点での得点を投入した。また、得意・苦手意識（t1）は標準化した値を投入した。

3-3. 結果と考察

調査時点間の得点の推移 分散分析の結果、内容構成力への自信のなさ（ $F(2,116) = 4.72, p < .05$ ）と人前に立つことへの嫌悪（ $F(2,116) = 4.28, p < .05$ ）の主効果がそれぞれ有意であった。多重比較（Bonferroni）の結果、内容構成力の自信のなさはt1がt3よりも高かった（ $p < .01$ ）。一方、人前に立つことへの嫌悪はt2がt1よりも高かった（ $p < .05$ ）（Table 4）。以上から、内容構成力に対する自信は高まった一方で、人前に立つことへの嫌悪も高まる傾向が認められた。

潜在成長曲線モデルに基づく分析 潜在成長曲線モデルを用いた仮説1への分析により、内容構成力への自信のなさの変数を投入したモデルに対するあてはまりだけがよいと判断された（ $X^2(1) = 0.54, p = .46, CFI = 1.00, RMSEA = .00, SRMR = .02, AIC = 431.38$ ）。モデルの切片のパス係数の平均は2.75（ $p < .001$ ）で分散は0.67（ $p < .01$ ）であり、傾きのパス係数の平均は-0.16（ $p < .01$ ）で分散は0.04（*n.s.*），共分散は-0.02（*n.s.*）であった（Figure 3）。この

結果から、調査開始時点（t1）の内容構成力への自信のなさには個人差があり、ばらつきが生じていると解釈できる。さらに、この得点が1年を通して低下する傾向にあり、変化の個人差は小さいとも解釈できる。

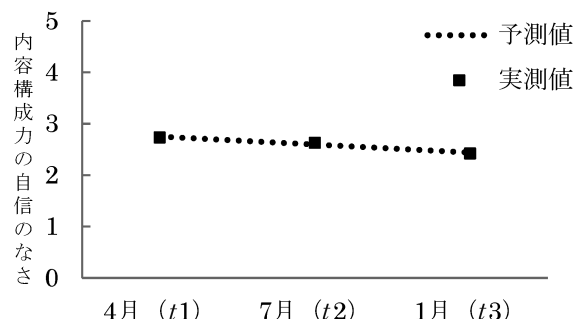


Figure 3 潜在成長曲線モデル（仮説1）に基づく予測値と実測値の推移（内容構成力への自信のなさ）

仮説2に対する分析により、内容構成力への自信のなさと他者への意識の高まりの変数を投入したモデルへのあてはまりが良いと判断された（内容構成力への自信のなさ： $X^2(3) = 1.27, p = .74, CFI = 1.00, RMSEA = .00, SRMR = .02, AIC = 607.21$ ，他者への意識の高まり： $X^2(3) = 2.74, p = .43, CFI = 1.00, RMSEA = .00, SRMR = .03, AIC = 717.96$ ）。

t1の得意・苦手意識から内容構成能力への自信のなさの切片へのパス係数は-0.29（ $p < .01$ ），傾きへのパス係数は0.01（*n.s.*）であった。この結果から、1年開始時点で得意意識が高い人ほど内容構成力への自信のなさが低いが、その後の変化量には影響しないと解釈できる。

また、得意・苦手意識から他者への意識の高まりの切片へのパス係数は-0.13（*n.s.*），傾きへのパス係数

Table 4 各調査時期の得点の平均値・標準偏差および分散分析結果

	得意・苦手意識	内容構成力への自信のなさ	人前に立つことへの嫌悪	他者への意識の高まり
調査時期	M (SD)			
4月(t1)	2.58 (1.09)	2.73 (0.99)	2.13 (0.94)	2.70 (1.27)
7月(t2)	2.42 (1.18)	2.63 (0.95)	2.38 (0.96)	2.83 (1.35)
1月(t3)	2.51 (1.18)	2.42 (1.04)	2.39 (0.95)	2.57 (1.36)
F (2, 116)	1.09	4.72	4.28	1.80
p	.34	.01	.02	.17
多重比較 (Bonferroni)		t1 > t3	t1 < t2	

N = 58

は 0.08 (*n.s.*) であった。モデルの切片のパス係数の平均は 2.77 ($p < .001$) で分散は 1.06 ($p < .01$) であり、傾きのパス係数の平均は -0.08 (*n.s.*) で分散は 0.07 (*n.s.*)、共分散は -0.04 (*n.s.*) であった。この結果から、1 年開始時点で得意意識は他者への意識の高まりの個人差を予測するのには有用であるが、その後の変化量には影響しないと解釈できる。

IV. まとめ

本稿では、環太平洋大学で行われているスピーチ活動の成果を検討するための試みの一つとして得意・苦手意識に注目し、指標を用いて分析した。

1 年生を対象に行った前期と後期の取り組みから得られた結果として、以下の 3 点を挙げる。

1. 内容構成力への自信のなさが低下した。
2. 人前に立つことへの嫌悪が高まった。
3. 得意・苦手意識と他者への意識の高まりは変化がなかった。

入学時点の得意・苦手意識の高低に関わらず、内容構成力への自信のなさが低下する傾向を示した。本学での学びによって、スピーチの内容を考える力が伸びたといえる。その一方で、人前で話すことへの嫌悪は入学当初よりも高まった。調査 1 において、上級生の得点が新入生よりも高かった。つまり、他者のスピーチを見聞きすることで、社会的比較が生じ、それが嫌悪感の上昇につながっていると考えられる。今後は、人前で話すことへの嫌悪感を減じる工夫が求められるだろう。さらに、得意・苦手意識には 1 年間を通しての変化がなかった。得意・苦手意識の変化の方向に個人差があったため、十分な差が出なかった可能性が指摘される。今後は、得意・苦手意識が上昇した者と下降した者の違いについてさらに詳細に検討すべきだろう。

本稿の限界として、サンプル数が少ないために、詳細な分析ができなかったことと、調査時期の短さがある。より多くの学生を測定し、1 年次から 4 年次までの意識の変化をとらえていく必要があるだろう。さらに、学生の主観に基づく測定であることも限界として挙げられる。今後は、自己評価だけでなく実際のパフォーマンスを含めた検討が求められる。

V. 引用文献

日向野智子・小口孝司 (2007). 学級集団内地位と

パーソナリティ特性からみた対面苦手意識 実験社会心理学研究, 46 (2), 133-142.

豊田秀樹 (2014). 共分散構造分析 [R 編] - 構造方程式モデリング - 東京図書.

山田剛史・村井潤一郎・杉澤武俊 (2015). R による心理データ解析 ナカニシヤ出版.

吉澤英里 (2014). 青年期男女のスピーチに対する意識調査 - 自由記述への回答に基づく考察 - 青山学院大学教育人間科学部紀要, 5, 139-147.

注

- 1 調査にご協力をいただきましたメンターの先生方ならびに学生の皆様に御礼申し上げます。
- 2 本稿のデータの一部は日本教育心理学会第 59 回総会 (2017) にて発表された。